博物館休館日カレンダー
2022年 9月

日	月	火	水	木	金	土
28	29	30	31	1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

□ 休館日 ※情報はR4.8.20現在

※お詫びと訂正
博物館だよりNo.189において、下記記事に誤りがありました。訂正と共にお詫び申し上げます。(誤)福田安治➡(正)福田安次

みやこ町歴史民俗博物館

博物館だより

MIYAKO TOWN DIGITAL MUSEUM
www.miyako-museum.jp

*No.*190

令和4年9月1日
みやこ町歴史民俗博物館発行

福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL0930－33－4666
FAX0930－33－4667

◆博物館NEWS

夏の企画展　折り鶴が運んだ「平和の木」植樹25周年記念企画

綴り方教師が愛した「河童(かっぱ)たち」展

―中尾廣治資料「河童コレクション」と戦後「綴り方教育」の一断面―

会期：8月2日(火)～9月18日(日)

故中尾廣治(なかおひろはる)氏は(1928～1991)「綴り方(つづりかた)(作文)」教育による子どもたちの成長を願った京築地域の一小学校教師です。その活動成果は、同教育に関する豊富な実践や著作、ことに旧犀川町立鐙畑小における「広島の語り部・福田安次(ふくだやすじ)さん」との交流、同(現みやこ町立)犀川小への「被爆エノキ」の記念植樹等として結実し、今なおその事績や人柄が慕われています。一方で氏は「河童」のコレクターとしても知られ、各地の様々な素材の河童の人形や工芸品・書籍等の資料を800点近く収集していました。

このたびその一部を、氏が生涯取り組んだ綴り方教育や被爆エノキを巡る物語の資料とともにご紹介することとなりました。子どもと地域と平和を愛した綴り方教師の心温まる「河童遺産」で「ほっこり」してみませんか。

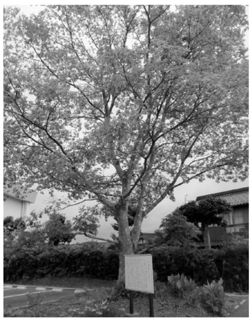
▲中尾先生一番のお気に入り「助六河童」(東京都)江戸小玩具の逸品で家族からの退職記念品の由

●主な展示資料
・やきもの系河童人形
・工芸品(徳利・暖簾等全国各地)
・綴り方資料(日誌・書簡など)
＊福田さんの願いが籠る千通の葉書
＊中尾先生の情熱「ゴマ粒文字」葉書

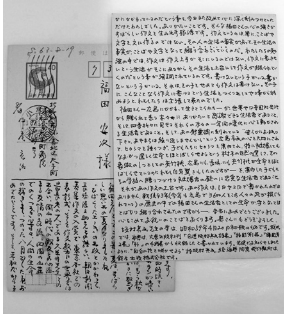
●観覧料　無料(常設展の観覧については有料です)

●開館時間　9時30分～17時00分

●休館日　月曜・祝日の翌日



▲植樹25周年を迎える被爆エノキ　平和への願いがしっかりと根付く



▲中尾先生の超絶「ゴマ粒文字」葉書　伝えたい想いを溢れんばかりに綴る

▲各地の河童が勢揃いのコレクション　河童の本場・筑後川流域産が目立つ

◆講座・教室・催し物ガイド

9月の歴史講座

【漢詩紀行講座】
9月3日(土)　9時30分～

【古文書講座】
9月10日(土)　10時～

【古典かな講座】
9月17日(土)　9時30分～

【みやこ学講座】
9月24日(土)　13時30分～

※日程等変更となる場合があります。
※見学会等は別途通知します。

博物館で「楽習」始めませんか？

博物館は郷土資料と学芸員らのサポートによる知と学びの拠点です。以下の会や講座を利用して楽しく学びませんか?詳しくは博物館へお問合せ下さい!

★博物館友の会
バスハイク・歴史たんけんウォーク等の学びの旅やイベントに参加できます。

★文化遺産ボランティア(豊み隊!)養成講座
町の宝をガイド&ガードするスタッフを募集・養成する講座です。今からでも大丈夫!

9月の臨時休館・開館のお知らせ

9月の博物館は事業都合により、左記の期日を臨時に休館・開館します。通常とは異なる運用となりますのでご注意下さい(休館日カレンダー参照)。なお、詳細の確認等は博物館までお願い致します。

・**臨時休館日**
9月19日(月)敬老の日
※翌20日(火)も休館(通常休館)

・**臨時開館日**
9月24日(土)

7月の業務日誌から

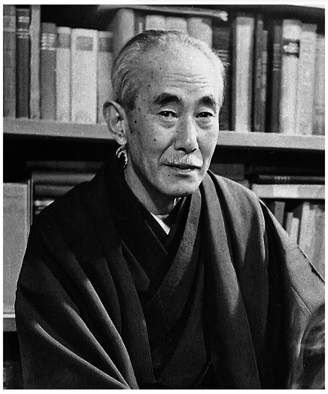
▲豊前国府跡出土の木簡4点(手前の箱の中)を高精細画像で撮影したのち徹底した表面観察を行いました

7月24日(日)、犀川帆柱にある国の重要文化財・永沼家住宅で夏の一斉除草が行われました。豊み隊!も参加して昨年に続く「石垣美観復活プロジェクト」第2弾に着手し、見事な「江戸の石垣の美」を取り戻しました。

7月29日(金)、奈良国立文化財研究所の研究員が木簡資料調査に訪れました。木簡の多くは古代の役人が残した行政情報ですが、おまじないや落書き等もあって、当時の暮らしのリアルな記録として貴重なものとのことです。

▲苔だらけの石垣は全体が緑色でしたが これを除くと見事な白亜の石垣に…新たな名所ができた気分です!

みやこの歴史発見伝151
明治の二大文豪を支えたみやこ町の偉人②


小宮豊隆（1884～1966）

夏目漱石肖像
（みやこ町歴史民俗博物館蔵）

80年目の「千円札」

新型コロナウイルス感染拡大に伴い国内でも急速にキャッシュレス化が進みましたが、日常生活では１３００年にわたって使用されてきた「硬貨」や「紙幣」が広く流通・使用されています。中でも私たちに最もなじみ深い紙幣である「千円札」は昭和17年（１９４２）にその様式が定められ、今年で80年を迎えます。この紙幣の「顔」となった人物も初代の日本武尊から聖徳太子、伊藤博文、夏目漱石と続き、現在は野口英世の肖像が用いられています。２年後の令和６年（２０２４）には新たに熊本県小国町出身の微生物学者、北里柴三郎の肖像による千円札が発行される予定です。昭和59年（１９８４）から平成19年（２００７）まで23年にわたって発行された千円札には当館に収蔵されている夏目漱石の写真の肖像（左上写真）と同じものが用いられています。今回は、森鷗外と並び「明治の二大文豪」として知られる夏目漱石の門下生で、漱石文学の研究や作品をまとめたみやこ町出身の小宮豊隆についてご紹介します。

小説『三四郎』のモデル

夏目漱石を代表する小説『三四郎』の中に、主人公が「福岡県京都郡」と住所を記載する場面があります。この主人公のモデルになった人物こそ、みやこ町出身のドイツ文学者で文芸評論家の小宮豊隆です。小宮豊隆は明治17年（１８８４）、仲津郡久富村（現在のみやこ町犀川久富）で生まれます。明治35年（１９０２）福岡県立豊津中学校（現在の育徳館高校）を卒業した彼は、第一高等学校（現在の東京大学教養学部）へ進学し、その後、東京帝国大学独文科に入学しました。同学年には安倍能成などの漱石門下生が名を連ねています。卒業後は、慶応大学、法政大学などで教鞭を執ります。大正12年（１９２３）には一年間ヨーロッパに留学し、その翌年、東北帝国大学（現在の東北大学）のドイツ文学講座の初代教授に就任。戦後は、東京音楽学校（現在の東京藝術大学）の校長や、学習院女子短期大学の学長などを歴任しています。

漱石神社の神主

小宮豊隆は東京帝国大学入学の際、従兄弟の犬塚武夫（ロンドンで漱石と同じ下宿に住んでいた人物）の紹介で当時東京帝国大学で英語教師を務めていた夏目漱石と出会い、大学在学中の保証人になってもらいました。これ以降、生涯にわたって師弟の関係を結ぶことになります。漱石に対する豊隆の敬愛の念は漱石自身からたしなめられるほど強く、周囲の人々から「漱石神社の神主」と揶揄されることもありました。大学の講義では専攻していたドイツ語の講義よりも漱石の英文科の講義ばかりを聴講したという逸話もあります。また、明治39年（１９０６）から始まった「木曜会」（漱石宅で毎週木曜日に漱石門下生を中心に開催された会合）では、大正５年（１９１６）の最後の会まで皆勤だったと伝えられます。

「漱石全集」の編集

大正５年（１９１６）の漱石没後、小宮豊隆は「漱石全集」の刊行を発議し、自ら「漱石伝」を執筆すると述べています。数多くの優秀な門下生が名を連ねる中、各々の担当を受け持つ案も検討されましたが、同窓の安倍能成は「小宮豊隆に全てを託したい」と提案したといわれています。小宮豊隆は「漱石先生を語るのであれば、自分がその第一人者だ」という自負もあり、周囲の門下生も漱石に対する豊隆の思いを理解していたことが伺えます。豊隆の「漱石全集」編集に向けた執念は凄まじく、漱石に関する膨大な資料を集め、これを基に編集に没頭します。まとめられた全集の完成度は高く、特に漱石没後20年を迎え、昭和10年に刊行された決定版「漱石全集」では、全ての作品の解説文を執筆するなど、漱石に対する豊隆の強い思いが込められたものでした。「漱石全集」は豊隆の漱石研究に向けた探求心の賜物であり、彼の研究成果は非常に高い評価を受けています。夏目漱石没後１００年以上が経過しますが、今なお夏目漱石が執筆した文学作品は、教科書等に掲載され、国内外で愛読されています。夏目漱石を調査・研究をする上で小宮豊隆は欠くことのできない最も重要な人物に位置付けられています。

文豪を支えた人物が作詞した校歌

森鷗外の意志を引き継いで元号「昭和」を考案した「吉田増藏」、夏目漱石の作品の集成を行い、研究に努めた「小宮豊隆」という明治の二大文豪をそれぞれ支えたみやこ町出身の２人について現在も大学や研究機関から調査の依頼が多数寄せられます。吉田増蔵は豊津中学校（現在の育徳館高校）の校歌の作詞に携わりましたが、漢学者の彼が作詞した校歌は多少難解であったため、新たに小宮豊隆によって作詞された現在の校歌が歌い継がれています。育徳館高校は今年で２６４年を迎えますが「明治の二大文豪を支えた人物」が携わった校歌もまた学校の歴史として永く伝えられていくことでしょう。

（井上信隆）